

子どもの気質と母親の心の理論が子育て不安に影響するのか

Do Temperament of Child and Mother's Theory of Mind influence on Child-Rearing Anxiety?

菊野春雄・菊野雄一郎

1. 問題と目的
2. 方法
 - 2-1 調査参加者
 - 2-2 研究計画
 - 2-3 手続き
 - 2-4 調査内容：
3. 結果と考察
 - 3-1 子育て不安と心の理論
 - 3-2 子育て不安と子どものタイプ
4. 考察
5. 引用文献
6. 謝辞

1. 問題と目的

これまで子育て不安について多くの研究が行われている(たとえば、大日向、2002;吉田、2012など)。子育て不安は、母親の問題、夫婦の問題という家庭に限られた課題だけでなく、少子化とも関連した課題でもある。この課題を解決することが日本の将来にとって重要な喫緊の課題でもある(佐藤、2008)。

本研究では、この子育て不安に影響する要因を調べることを目的に研究を行った。特に、本研究では、母親の心の理論と子どもの気質に焦点を当て、子育て不安がどのように生じるのかを検討した。

本研究の第一の目的は、母親の心の理論が、子育て不安にどのように影響するのかを検討することである。心の理論(Theory of Mind)とは、人の気持ちを推測する能力であり、言語理解やコミュニケーションなど我々の発達に欠かせない能力である(Gopnik, & Astington, 1988; Mitchell, 1997; Perner, Frith & Leslie, 1987; Wimmer, & Perner, 1983)。心の理論は文化やきょうだい数などの後天的要因によって違いが見られるなど、心の理論にも個人差があることがいくつかの研究で示唆されている(Keating & Heltzman, 1994; Mitchell, 1997;

Wellman, Cross, & Watson, 2001)。

母親の心の理論の個人差が子育て不安にどのような影響を及ぼすのだろうか。子育てを行う際に、母親が子どもの気持ちを推測することは重要なプロセスである。子どもが乳児の場合、子どもは母親に自分の気持ちを言葉で伝えることはできない。そこで、子どもは自分の身体の動きや表情などを手掛かりとるように母親に気持ちを伝える。母親は、子どもの身体の動きや表情などの状態を読み取ることによって、子どもの気持ちを推測することが可能である。この時に使われる能力が心の理論である。また、言葉の発達が見られる幼児の場合でも、自分の気持ちを言葉で表すには十分にできないことも多い。また、子どもは自分の気持ちを直接的に表出するとは限らない。母親はそれらも含めて、心の状態を推測する必要がある。

それでは、母親は子どもの気持ちを容易に推測できるのだろうか。子どもの気持ちを推測することは、一般に考えられているよりもかなり難しいことが、いくつかの研究で報告されている。例えば、Keating & Heltzman, (1994)は、大人が子どもの嘘を正しく推測できるかどうかを調べている。この実験では、

子どもに甘いジュースと苦いジュースを飲むように依頼した。そこで、第三者からどちらのジュースが苦いジュースであるのかが分からないように飲んでくれるように依頼した。子どもがジュースを飲むその状況をビデオで撮影した。その後、そのビデオを大人に見せ、どのジュースが苦いジュースであるのかを判断するように求めた。その結果、大人であっても、子どもの顔を見ただけでは、子どもの嘘を見抜けないことが認められた。同様の結果として、幼児の子どもを対象にした場合に、大人は子どもの嘘を正確に見抜くことが難しいことが報告されている(Lewis, Stranger, & Sullivan, 1989)。

これらの結果は、大人であっても子どもの気持ちを理解するのは難しいことを示している。母親が子育てにおいて、子どもの気持ちを理解することが重要であり、母親が優れた心の理論を取得しているかどうかが必要になると考えられる。

母親の心の理論は子どもの気持ちを推測するのに重要なだけでなく、母親と父親とのコミュニケーションにとっても重要な役割があることが仮定される。子育ては基本的には父親と母親が共同して参画することが必要であろう。そのためにも、夫婦間のコミュニケーションは重要であり、そのコミュニケーションがうまく行くかどうか、母親の子育て不安に関係することが多くの研究で示唆されている(伊藤・相良・池田, 2007; 森・橋本, 2012; 石・桂田, 2006; 住田・藤井, 1998)。母親と父親とのコミュニケーションがスムーズであれば、子育てにおける不安を軽減できる。しかし、コミュニケーションがスムーズでない場合には、子育ての不安は軽減できないだけでなく、負荷がさらに大きくなると予想され、心の理論の役割が重要となってくる。

本研究の第2の目的は、子どもの気質が母親の子育て不安にどのような影響するのかを検討することである。子どもは生後すぐに多くの認知能力を持って誕生する(たとえば、Goswami, 1998)。また、子どもは誕生直後から、認知能力だけでなく、個性のある気質を持って生まれてくるということがいくつかの研究で明ら

かになっている(武井・寺崎, 2003; 水野, 2003; 菅原・島・戸田・佐藤・北村, 1994; Hogg & Blau, 2005; Thomas & Chess, 1986)。たとえば、Hogg & Blau(2005)は、「エンジェルタイプ」「育児書タイプ」「デリケートタイプ」「活発タイプ」「むっつりタイプ」の気質があることを示している。また、菅原・島・戸田・佐藤・北村(1994)によると、Thomas & Chess (1986)は「扱いにくい子ども(difficult children)」「扱いやすい子ども(easy children)」「エンジンが掛かりにくい子ども(slow-to-warm-up children)」の気質があることが示唆される。このように、子どもは誕生直後からそれぞれ気質を持って生まれていることが示唆される。

これらの研究から、子どもが誕生時から気質を持っていることで、母親にとって子育てをしやすい子どもや子育てをしにくい子どもがいることが示唆される(菅原・島・戸田・佐藤・北村, 1994; Hogg & Blau, 2005; Thomas & Chess, 1986)。たとえば、ミルクや排便を規則的に行う子どもの場合には、母親は子どもの行動は予測しやすく、子育ての負担も少ない。このような気質を持った子どもの場合、母親にとって子育てが容易で、子育てに対する自己有能感も大きく、子育て不安も小さいだろうと仮定される。

他方、子どもが外界の変化に敏感であったり、周期性がない場合、母親は子どもの行動を予測することむづかしい。そのため、母親の子育てが難しく、子育てへのストレスが大きい。そのため、母親の子育てに対する自己有能感は低くなりやすい。これらのことにより母親の子育て不安が高くなると予想される。そこで、本研究では、子どもの気質によって、子育て不安がどのように異なるかを検討した。

2. 方法

2-1. 調査参加者

調査参加者は、保育所と幼稚園に通園する乳幼児の母親120名であった。

2-2. 研究計画

調査は、子育て不安、表情認識などを調べ

ることを目的として実施した。本研究では、その調査の中の、母親の子育て不安、子どもの気質、母親の心の理論の3つの要因について分析した。

2-3. 手続き

調査は、保育園・幼稚園で保育者が、母親に配布し、数日後に、保育園・幼稚園で回答を回収した。アンケートは無記名で行われた。

2-4. 調査内容

本研究で分析された子育て不安テスト、子ども気質テスト、心の理論テストは以下のように構成されていた。

(1) 子育て不安テスト

子育て不安テストは、母親の子育てに対する不安の傾向を測定するためのテストであり、以下の10の質問項目で構成されていた。(1)子育てから離れたいことがある、(2)子どもと一緒にいると楽しい気分になる。(3)子どもを育てることは楽しい、(4)子どもを育てることがつらくなることもある、(5)子どもの顔を見たくなくなる、(6)子どもが泣いたらどうしようかとパニックになる、(7)自分の子育てがこれでよいのか不安になる、(8)子どものことがわずらわしくてイライラする、(9)子育てで、したいことができなくてあせる、(10)母親としての自信がない。これらの項目について、調査参加者が、「全くそうである」「そうである」「そうでない」「全くそうでない」の4段階尺度で回答するようになっていた。

(2) 子ども気質テスト

子ども気質テストは、子どもの乳児期の気質を調べるものである。これは、菅原など(1994)の日本語版RITQを一部修正して作成した。質問項目は以下の21項目で構成されていた。(1)食事は好き嫌いなく、大人しく食べた、(2)眠くなった時に、あやすと大人しくなった、(3)ベビーカーでは大人しくしていた、(4)誰かが通ると遊びをやめてそちらを見ていた、(5)寝床などで30分以上一人遊びをした、(6)おもちゃが汚れると、嫌がってもぞもぞ

動いた、(7)決まった時間にミルクをほしがった、(8)毎晩決まった時間に眠くなった、(9)昼寝をする時間は大体一定していた、(10)ミルクを飲んでいる時に音がすると、吸うのをやめて見た、(11)家に知らない人が来ても平気であった、(12)おもちゃを替えると、うれしそうなお声を出した、(13)初めての食べ物でも平気で食べた、(14)離乳食の固さ・味・温度が変わると嫌がった、(15)お気に入りの玩具があると、10分以上遊び続けた、(16)欲しい玩具が取れないと、2分以上取ろうと頑張った、(17)パッと明るくなると、びっくりした、(18)なれない場所に初めて行っても機嫌がよかった、(19)初めての人に預けると嫌がった、(20)嫌がらずに爪を切らせた、(21)おもちゃが濡れても、あやすと大人しくなった。

回答に際しては、歩き始めるまでの子どもの様子を思い出して回答するように求めた。これらの項目について、調査参加者が、「全くそうである」「そうである」「そうでない」「全くそうでない」の4段階尺度で回答するようになっていた。

(3) 心の理論テスト

心の理論テストは、調査協力者の心の理論を測定するための質問紙による調査である。この調査は、菊野(2013)で作成された以下の10の質問項目で構成されていた。(1)行動から、人の気持ちを推測するのは難しい、(2)冗談を言われても、分かりにくい、(3)冗談を言うのは得意ではない、(4)ごまかす必要があっても、うまくごまかせない、(5)会話中、相手と話がかみ合わないことがよくある、(6)人を指図するのがうまいと言われる、(7)相手の表情を見ているだけで相手の気持ちを推測できる、(8)相手の気持ちの裏を読むことが苦手である、(9)気持ちが、表情に出てしまう、(10)話の内容を聞き間違ふことがある

これらの項目について、調査参加者が、「全くそうである」「そうである」「そうでない」「全くそうでない」の4段階尺度で回答するようになっていた。

3. 結果と考察

本調査結果を分析するに当たり、120名の調査結果の内4名の調査回答が無回答が多く見られた。そこで、本研究では、これらの調査結果を除き、残りの116名の回答について分析した。また、子育て不安テストと心の理論テストについては、回答による尺度得点に基づいて数値化した。それぞれの得点範囲は、1点から4点であった。子ども気質テストについては、菅原・島・戸田・佐藤・北村(1994)を参考に、「見知らぬ人・場所への恐れ」「味覚的敏感さ」「周期の規則性」「フラストレーション・トレランス」「視覚的敏感さ」「注意の持続性と固執性」「触覚的敏感さ」ごとに得点化した。

3-1. 子育て不安と心の理論

子育て不安と心の理論との関係を分析するために、子育て不安と心の理論との相関係数を求めた。その結果、子育て不安と心の理論の間の相関は0.226であった。相関係数の有意性を検定したところ、5%水準で有意であった($t(114)=2.47, p<.05$)。

3-2. 子育て不安と子どものタイプ

(2.1) 子育て不安得点と子どものタイプとの関係

子育て不安と子どものタイプの関係について、相関係数を求めたところ、Table 1 のような結果が得られた。

有意な相関はフラストレーション・トレランスと周期の規則性の質問項目で見られた。まず、フラストレーション・トレランスの質

問項目では、子育て不安との間に有意な正の相関が認められた($r=0.211, p<.05$)。周期の規則性の質問項目で育児不安との間で10%までの危険率を許せば有意な負の相関が見られた($r=-0.181, p<.10$)。このほか、見知らぬ人・場所への恐れ、味覚的敏感さ、視覚的敏感さ、注意の持続性と固執性、触覚的敏感さの項目と有意な相関は認められなかった。すなわち、フラストレーション・トレランスの傾向が強い子どもほど、母親が有意に子育て不安になりやすいことを示している。しかし、周期の規則性の傾向の強い子どもの場合には、母親は子育て不安が生じにくいことを示している。

(2.2) 子育て不安の項目と子どものタイプとの関係

子どものタイプを表す項目の総数と子育て不安の各項目との相関係数を算出した。Table2は相関係数と有意性を示したものである。

子どもの気質に関連する有意な子育て不安の行動について、以下のような結果が得られた。(1)「見知らぬ人・場所への恐れ」については、「自分の子育てがこれでよいのか不安になる」との間に10%水準の危険率を許すなら有意な相関が認められた($r=0.180, p<.10$)。(2)「味覚的敏感さ」については、「子どもが泣いたらどうしようかとパニックになる」($r=0.180, p<.10$)と「子育てで、したいことができなくてあせる」($r=-0.210, p<.10$)について

Table 1 子どもの気質と子育て不安得点との相関係数

子どもの気質	相関係数	p
1 見知らぬ人・場所への恐れ	-0.033	
2 味覚的敏感さ	0.138	
3 周期の規則性	0.181	+
4 フラストレーション・トレランス	-0.211	*
5 視覚的敏感さ	0.126	
6 注意の持続性と固執性	0.126	
7 触覚的敏感さ	-0.095	

+ $p<.10, *p<.05$

10%水準の危険率を許すなら有意な相関が認められた。(3)「周期の規則性」については、「子どもが泣いたらどうしようかとパニックになる」が5%水準で有意であった($r=0.211$, $p<.05$)。(4)「フラストレーション・トレラン」については、「子育てから離れたいことがある」($r=0.313$, $p<.05$)「子どもと一緒にいると楽しい気分になる」($r=-0.302$, $p<.05$)「子どもを育てることは楽しい」($r=-0.252$, $p<.05$)「子どものことがわずらわしくてイライラする」($r=0.246$, $p<.05$)が5%水準で有意であった。(5)「視覚的敏感さ」については、「子どもが泣いたらどうしようかとパニックになる」が5%水

準で有意であった($r=-0.286$, $p<.05$)。(6)「注意の持続性と固執性」については、「子どもが泣いたらどうしようかとパニックになる」が5%水準で有意であった($r=-0.286$, $p<.05$)。(7)「触覚敏感さ」については、「子育てから離れたいことがある」($r=0.193$, $p<.10$)「子どもの顔を見たくなくない」($r=0.195$, $p<.10$)が10%水準の危険率を許すなら有意であり、「子どものことがわずらわしくてイライラする」($r=0.231$, $p<.10$)については5%水準で有意であった。

4. 考察

本研究の主な結果は、以下の通りであった。

Table 2 子どもの気質と子育て不安項目との相関係数

	1見知らぬ人・場所への恐れ	2味覚的敏感さ	3周期の規則性	4フラストレーション・トレランス	5視覚的敏感さ	6注意の持続性と固執性	7触覚的敏感さ
子育てから離れたいことがある。	-0.003	-0.006	-0.109	0.313*	0.020	0.020	0.193+
子どもと一緒にいると楽しい気分になる。	0.120	0.018	0.133	-0.302*	-0.015	-0.015	-0.032
子どもを育てることは楽しい。	0.142	0.144	0.101	-0.252*	0.084	0.084	0.114
子どもを育てることがつらくなることもある。	0.146	-0.020	-0.060	0.077	-0.114	-0.114	-0.090
子どもの顔を見たくなくなる。	0.013	-0.053	-0.113	0.048	-0.098	-0.098	0.195+
子どもが泣いたらどうしようかとパニックになる。	-0.014	-0.180+	-0.211*	0.160	-0.286*	-0.286*	-0.162
自分の子育てがこれでよいのか不安になる。	0.180+	-0.075	-0.087	-0.036	-0.045	-0.045	0.139
子どものことがわずらわしくてイライラする。	0.062	-0.022	-0.114	0.246*	-0.101	-0.101	0.231*
子育てで、したいことができなくてあせる。	0.005	-0.210+	-0.085	0.032	-0.073	-0.073	0.041
母親としての自信がない。	0.017	-0.149	-0.143	0.041	-0.015	-0.015	0.077

+ $p<.10$ * $p<.05$

(1) 子育て不安と心の理論の間の相関は有意であった。(2) 子育て不安と子どもの気質との有意な相関係数はフラストレーション・トレランスと周期の規則性の質問項目で見られた。(3) 子どもの気質を表す項目の総数と子育て不安の各項目との相関係数を算出したところ、気質ごとに子育て不安の特徴に差が見られた。これらの結果を中心に以下で考察したい。

まず、子育て不安と心の理論の間の相関が有意であった。この結果は、心の理論のような人の気持ちを推測する能力は、子育てにおいても重要な要因であることが示唆される。これについては、次のようなことが仮定される。子育てにおいて、母親は子どもの気持ちを推測しながら、接していくことが重要である。そこで、心の理論のように相手の気持ち、子育ての場合、子どもの気持ちを推測する力は重要なものであると仮定される。例えば、子どもが泣く、子どもがぐずるなどの場合、子どもが自分の気持ちを母親に言うことは難しい。心の理論が十分に機能するのであれば、子どもの行動や表情などを手掛かりとして、心の理論を媒介に子どもの気持ちを推測できるのではないだろうか。

また、子どもの気持ちを推測する際に心の理論を用いるだけではない。子育て不安においては、母親の子育てのパートナーである父親とのコミュニケーションは重要な要因になってくる(伊藤・相良・池田、2007; 森・橋本、2012; 石・桂田、2006; 住田・藤井、1998)。母親が父親の気持ちをどのように推測するのかも、子育て不安にとって重要な要因なのかもしれない。

子育て不安と子どものタイプとの相関係数について、フラストレーション・トレランスと周期の規則性の質問項目で見られた。まず、フラストレーション・トレランスと子育て不安の間で有意な相関が見られた。フラストレーション・トレランスを持った子どもの場合、子どもが次にどのような行動をするかは予測できない。これらのことが、母親にとって不安を喚起するものであり、また自己有能感を低下させることにつながったのではない

だろうか。

他方、周期性のある子どもの場合は、子育て不安が減少する傾向になった。これについては、周期性のある子どもの場合は、母親が子どもの行動を予測しやすい。また、母親の育児に対して不規則な反応をすることは少ない。そのため、母親は子育てをする際に、スムーズな子育てが可能である。そのため、母親は子育てについての自己有能感が促進される。これらのことが、子育て不安を減少させているのではないだろうか。

最後に、子どもの気質に対して、母親の具体的にどのような側面の子育て不安を持っているのかを考察したい。特に、有意差の多く見られた「フラストレーション・トレランス」に焦点を当てると、「子育てから離れたいことがある」「子どもと一緒にいると楽しい気分になる」「子どもを育てることは楽しい」「子どものことがわずらわしくてイライラする」で有意な相関が見られた。この結果から、フラストレーション・トレランスが見られない気質を持った子どもの場合、子育ての楽しさを実感できず、子どものことがわずらわしくてイライラし、子育てから逃避したいという子育て不安が強いことが示唆される。

「触覚敏感さ」については、「子育てから離れたいことがある」「子どもの顔を見たくなくない」「子どものことがわずらわしくてイライラする」で有意な相関が見られた。この結果から、触覚的敏感さの気質を持った子どもの場合、子どものことがわずらわしくてイライラする、子育てから離れたくなり、子どもの顔を見たくなくなるなど、子どもへの拒否的な感情が強くなることが示唆される。

また、気質に特徴的な傾向がある子どもの場合、子どもが泣いたらどうしようか不安になることで有意な相関が多く見られた。このことから、気質に特徴的な傾向がある子どもの場合、子どもの予想できない行動などに対する不安が強いことが示唆された。

5. 引用文献

Gopnik, A. & Astington, J.W. (1988) Children's Understanding of Representational Change

- and Its Relation to the Understanding of False Belief and the Appearance–Reality Distinction, *Child Development*, 59, 26–37.
- Goswami, U. (1998) *Cognition in children*. Psychology Press. 岩男卓美・上淵寿・古池若葉・富山尚子・中島伸子（訳）(2003) 子どもの認知発達 新曜社。
- Hogg, T. & Blau, M. (2001) *Secrets of the Baby Whisperer: How to Calm, Connect, and Communicate with Your Baby*. Vermilion. 岡田美里（訳）2001 赤ちゃん語が分かる魔法の育児書 イースト・プレス。
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子（2007）夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響：自己開示を中心に、文教学院人間科学部研究紀要、9、1–15。
- 菊野春雄（2013）心の理論を行動観察から測定するための試み：心の理論を構成する因子の解明、大阪樟蔭女子大学附属カウンセリングセンター研究紀要、7、5–8。
- Keating, C.F. & Heltzman, K.K. (1994) Dominance and deception in children and adults: Are leaders the best misleaders? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 312–321.
- Lewis, M., Stranger, C. & Sullivan, M.W. (1989) Deception in 3-year-olds. *Developmental Psychology*, 25, 439–443.
- Mitchell, P. (1997) *Introduction to theory of mind: Children, autism and apes*. Arnold.
- 水野里恵（2003）乳幼児の気質研究の動向と展望、愛知江南短期大学紀要、32、109–123。
- 森友理奈・橋本紀子（2012）子育てをめぐる夫婦間のコミュニケーションのあり方と子どもの社会性の発達との関連、女子栄養大学紀要、43、41–51。
- 大日向雅美（2002）育児不安とは何か：その定義と背景 発達心理学の立場から。大日向雅美編、こころの科学、103、育児不安、10–15。
- Perner, J. Frith, U., Leslie, A.M. (1987) Exploration of the autistic child's theory of mind: Knowledge, belief and communication, *Child Development*, 60, 689–700.
- 佐藤龍三郎（2008）日本の「超少子化」：その原因と政策対応をめぐる 人口問題研究、64、10–24。
- 石曉玲・桂田恵美子（2006）夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討、母性衛生 47、222–229。
- 菅原ますみ・島 悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則（1994）乳幼児期にみられる行動特徴：日本語版RITおよびTIS の検討、教育心理学研究、42、315–323。
- 住田正樹・藤井美保（1998）育児不安に関する研究：父親の場合、九州大学大学院教育学研究紀要、1、79–98。
- 武井祐子・寺崎正治（2003）乳児期における「気質」研究の動向、川崎医療福祉学会誌、13、209–216。
- Thomas, A. & Chess, S. (1986) *Behavioral individuality in early childhood*. New York University Press.
- Wellman, H.M. Cross, D. & Watson, J. (2001) Meta-Analysis of Theory-of-Mind Development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 655–684.
- Wimmer, H. & Perner, J. (1983) Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103–128.
- 吉田弘道（2012）育児不安研究の現状と課題、専修人間科学論集 2、1–8。

6. 謝辞

本研究の調査についてご理解とご協力をいただいた保育園ならびに幼稚園の園長先生や主任の先生、保育者の方々にお礼を申し上げます。また、育児や家事などに忙しい中、本調査にご協力いただいた保育園と幼稚園のお母さま方や保護者の皆様方に感謝いたします。ありがとうございました。なお、本研究はJSPS科研費 25380905の助成を受けて行われたものである。

